

## 高等女学校の日常生活：女学生の楽しみや悩み

ロシア国立人文大学東洋文化・古典古代学部

アンナ・オースキナ

(Anna Oskina)

### 1. はじめに

#### 1.1. 研究の背景

日本における女性の教育は昔から男性のそれとは異なる長い歴史を持っている。『日本近代教育史辞典』には、「昭和二十二年(1947)教育基本法では男女の教育機会均等を定め共学を認めた」<sup>1</sup>と記されている。この記述から、1947年以前は、女性の教育が男性のそれとは独立して行われていたことがうかがえる。

1899年に公布された「高等女学校令」によって、女子中等教育が本格的に開始された。高等女学校の進学率に目を転じると、大正四年(1915)に5.0%、大正十四年(1925)に14.1%、昭和十年(1935)には16.5%となっている。この進学率から分かるように、高等女学校で学べた女子の数は限られていた。第一に、学校の数が非常に少なかったのである。昭和十年に、全国で公立・私立あわせて約800校のみで、高等女学校入学は狭き門であった。第二に、女学校の学費は高く、経済的に余裕がある家庭の子女しか進学できない事情があった。それゆえ、高等女学校への進学は、少女自身の学力はもちろんのこと、経済的な条件と両親の理解にも恵まれないとかなわなかった。

1899年に文相菊池大麓が、日本の女子の職は「結婚して良妻賢母となる」<sup>2</sup>ことであり、女子教育は「此の任に適せしむる」<sup>3</sup>を目的にすると述べているように、高等女学校の目的は良妻賢母の育成であった。また当時の高等女学校の生徒達を書き記した資料を分析すると、このような明確な教育的理想を体現すべく、努力する姿が見える一方で、その内面の生活は様々な別の楽しみや悩みに溢れており、非常に興味深いものがある

<sup>1</sup> 日本近代教育史事典編纂委員会編(1971)『日本近代教育史辞典』p.431.

<sup>2</sup> 総合女性史研究会編(2000)『史料にみる日本女性のあゆみ』吉川弘文館 p.142.

<sup>3</sup> 2に同じ。

## 1.2. 研究の目的

高等女学校に通う少女たちは、どんな学園生活を送り、どんな勉強をしていたのだろうか。また、彼女たちの間ではどんなものが流行っていたのだろうか。女学生達の日常生活に関する問題を明らかにしたい。

さらに、女性教育の歴史をたどることにより、各時代の女性の理想的なイメージを明らかにし、近代の女子教育がどのように変化してきたのかを示して行く。

## 1.3. 研究の方法

まず、平安時代から明治までに書かれた女性の教育に関する文字資料を分析する。これらの資料から、各時代の女性教育の進歩、理想的な女性のイメージを明らかにし、また女性の礼儀と義務がどのように変化していったのかを示していく。

次に、大正・昭和時代の人気少女雑誌を基に、高等女学校の女学生の日常生活を調べる。『少女倶楽部』、『少女画報』、『少女の友』、『令女界』などの雑誌から、女性のファッション、ヘアスタイル、手芸、憧れなどが明らかとなる。

当時の女性教育についての日本研究の観点から、女学生の勉強、養成、友情、「エス」(Sister)の関係などについて調べる。女学生の文通のやり取りや身の上相談によって、女学の夢、悩み、問題が明らかにしたい。

## 2. 女性教育の歴史：平安時代から明治時代まで

### 2.1. 平安時代の文学から読み取れる女性のイメージ

平安時代の女性は日本語で書かれた文学へ大きな貢献をした。当時の女性文学は、自分の周辺に対する観察にその特色があった。内裏に勤める女性はあまり外へ出ず、内裏の中で時間を過ごしていた。日記、随筆、物語などの文学が女性の手にとれるものが多かったのは、そのような理由からで、女性達は、作品の中で服装、外見、礼儀、才能などを詳しく

描写している。紫式部の『日記』、『源氏物語』、清少納言の『枕草子』を読むと、貴族の日常生活や習慣、風習がよく分かる。

石川松太郎(1973)が述べるように、「平安時代の貴族にあつては、女子の教養は音楽・和歌・書道の三分野を中心として、みやびやかな朗らかな女性に育つように仕込まれていた。それゆえ、教育の主な対象は青少年期の女性であつて、結婚生活へ入るまでの準備が目標」であつた。その才能によって、女性は格付けられた。女性と男性が直接会えなかつた時代なので、和歌は「話す」方法の一つになった。手紙の内容、様子、香りによって、知識や性格まで理解されていた。そして、服装の合わせが上手で、琴が弾け、綺麗に文字を書き、短歌も作れる女性が、良い妻であつたという。

以上から、一夫多妻という婚姻形態を持つ時代の理想的な女性のイメージは、才能が豊かで、心が優しく、外見が美しいというものであることが、『源氏物語』などからうかがえるのである。

## 2.2. 鎌倉・室町時代は平安時代の継承

鎌倉・室町時代の女性教育のテーマは、平安貴族の理想のイメージが受け継がれてきたものと言えそうである。

この時代の女性教育についての資料は、固有のジャンルとして存在していなかつた。そのような中、鎌倉時代の文学作品である阿仏尼(1221-1283)の『庭のをしえ』は、女性の教育について触れている。阿仏尼は、内裏に勤める娘に向けて、手紙を書いている。その中には、様々な相談や必要な才能、勉強、また人間関係の在り方に関しても詳しく説明されていた。

直接的には女性教育に関わらないが、御伽草子というジャンルにも、室町時代では、しばしば女性の教育が取り上げられている。例えば、『乳母の草紙』のテーマの中心は女子の教育である。主人公は二人の乳母で、全く性格が異なり、教育の方法も正反対である。理想的に描写された妹君の乳母は「引き替えて心様よろしく、「源氏」「狭衣」などやうの物語もたどたどしからず、琴・琵琶・歌などの道」をよく知っていた。

この時代の女性教育に関して石川松太郎(1973)は次のように述べている。

「鎌倉・室町の時代になつても公家の女子は、古代と同じく、音楽・和歌・書道をもって重要な教養分野としたのであるが、有職故実を尊ぶ時勢の影響もあつて、歴史にかかわる学習の風もおこつた。『庭の訓(おしえ)』〔鎌倉初期撰〕などに、その例

証をみいだすことができる。けれども、その読みものからみても、『乳母の草紙』などに記されているところから検討しても、公家の女子教育の理念は、おおむね平安時代そのままの伝統を継承したもので、伸びやかな朗らかな青年女性を養成することにおかれていたのである」。

つまり、『乳母の草紙』の作者は不明なのであるが、妹君の乳母の手紙の中に、阿仏尼の作品からの直接的な引用があるため、この作者が阿仏尼の『庭のをしえ』を知っていたことが分かるのである。

しかし『源氏物語』と比べると、『庭のをしえ』と『乳母の草紙』は、仏教の影響を受けており、次のような特徴を持つ。妹君の乳母の教えでは、美しい外見や芸能の多才さより心の方が大事、他人に対して、悪口を言わず、仏を信仰しなければならない、両親や年上の人を尊敬し、世話をしなければならないことなどが述べられている。

石川松太郎はまた、「いっぽう、鎌倉時代から興ってきた武家の女子は、その環境から、いきおい、勇武と貞操とを重んずるよう仕込まれた。しかし、室町時代にはいると、武家の子女も貴族生活からの影響をうけて、しとやかで貞淑の徳を守り、音楽・和歌・書道などの教養をもつよう教育されることとなったのである。また、このころから、仏教思想や儒教思想の感化をうけいれて、男尊女卑の風がおこり、それがただちに教育内容に作用していったことは、注目すべき事実である」と述べている。つまり、仏教の影響を受けながら、平安時代の女性イメージが継承され、「しとやかで貞淑」な女性の理想像が強化されていったと言えるだろう。

またこの他、『庭のをしえ』や『乳母の草紙』に女性が女性に教えるという教育スタイルが描かれていることは重要である。これは母から娘へ、乳母から養子の妹への直接の教えである。

### 2.3. 近世初期に中国から直輸入された女教訓

江戸時代になると、幕府による統治が安定し、260年間平和な状態が続いた。この時代には儒学などの教学が盛んになり、社会一般に及んだ。石川松太郎（1977）によると、「女子教育に独自の意義と任務とがあたえられ、領域が設定されるようになると、女子のみを対象とした教訓書なり教科書なりが、近世の初期からさかんに編集され刊行されるようになった」。

近世初期の最初の女訓書は中国からの直接輸入されたものであった。中国の教典の原文をそのまま用いて、これに和文の解説をくわえ、それを使った。例えば、『女四書』、『古列女伝』、中江藤樹の『鏡草』、熊沢蕃山の『女史訓』、中村惕斎の『比売鑑』などがある。石川松太郎（1977）は「仏教思想を取り入れまして、分量が多いし、内容も難解だったので、一般に普及するに至っていないと思われています」と述べている。

中国から直輸入された教訓書は、一般庶民が読めない難しい内容であった。ところが、石川松太郎（1977）によると、「一七世紀から一八世紀にはいり、文字の読み・書きを必要とする女子庶民の人口が増大した事実とあいまって、諸教訓の要旨をやさしく短く書きあらため、手習い用の教訓書・教科書にしたてたものが現れはじめ、年月をかさねるごとに、その数は増大する動向にあった」という。

江戸後期に最も普及した女教訓はいわゆる『女大学』であった。編者は不明であるが、本文の末尾に「益軒貝原先生述」と明記されている。貝原益軒（1630-1714）は儒学者・教育家であった。『益軒十訓』は貝原益軒が和文で著した10種の教訓書である。家訓・君子訓・大和俗訓・楽訓・和俗童子訓・五常訓・家道訓・養生訓・文武訓・初学訓からなっている。『女大学』は『和俗童子訓』の巻5「教女子法」をもとに、益軒が死んだ後で刊行されたものである。

「教女子法」において、貝原益軒は女子や女子の両親に向けて、教育の方法を詳しく述べている。それによれば、女性と男性の間に明確な差があるので、教育の方法も全く違うという。即ちまず「男性は外に出でて、（中略）女子はつねに内に居て」<sup>4</sup>、後には「いにしえ、天子より以下、男は外をおさめ、女は内をおさむ」<sup>5</sup>と述べられる。

また貝原益軒は、「婦人は、人につかうるもの也」であるとし、身分に関わらず早朝から深夜まで怠けずに、舅姑や夫に仕えなければならないし、「みずから衣をたたみ、席を掃き、食をととのえ、うみ、つむぎ、ぬい物し、子をそだてて、けがれをあらひ、（中略）是れ婦人の職分」<sup>6</sup>だと述べている。

『女大学』の文章は短く、漢字にふりがなが付いているので、当時の女性にとってもとても分かりやすいものだった。石川松太郎（1977）は、女子は本書を用いて、「その内容をなす教訓の条々を身につけると同時に、文字の手習いに役立つ、すなわち読本用兼習字用教科書として機能できるように作製されている」と述べている。

---

<sup>4</sup> 石川松太郎（1977）『女大学集』p.5.

<sup>5</sup> 石川松太郎（1977）『女大学集』p.10.

<sup>6</sup> 石川松太郎（1977）『女大学集』p.9.

## 2.4. 明治時代の教育令

明治時代になると、女性の身分も変わり、『女鬢必読「女訓」』には初めて「自由の権」が取りあげられた。また『近世女大学』は、最初「人は男女の差別なく、皆、不羈不制、自主自立の権有り」と述べるとともに、「(女性は) 只天然之位次、男子の亜(つぎ)に有れば、宜敷く、男子に対し、礼儀を欠き信従の徳を失うべからず」と書く。石川松太郎(1977)は、「まだ近世的な家族道徳や男尊女卑の思想を完全に払拭したものは、いいがたい」と述べている。

明治維新の流れの中で、日本政府は教育に関しても、重要な改革を行った。『日本近代教育史辞典』<sup>7</sup>によると、小学校令・中学校令等の学校令を作成した森文部大臣は、女学校については特に学校令を用意しないまま不慮の死をとげてしまったが、明治二十四年に中学校令が改正された際に高等女学校に関して一カ条が加えられることとなった。その高等女学校令には「高等女学校では女子に須要なる高等普通教育を為すを以て目的とす」<sup>8</sup>の内容があり、高等女学校の創立は女性教育の進歩における新しいステップとなった。

## 3. 大正時代の高等女学校

### 3.1. 進歩や伝統

以上述べてきた女性教育の歴史をふまえ、ここからは大正時代に重要になった高等女学校の特徴を明らかにしたい。『日本近代教育史辞典』によると、「大正初期より、デモクラシーの風潮のもとで婦人問題が初回の注目をひき、参政権獲得、女子の純潔擁護、職業女性の社会進出、女子の高等教育などが盛んにとりあげられるようになった」<sup>9</sup>という。ところが、「女子教育の方針として、明治以来の良妻賢母主義を再確認し、また女子の高等教育については、虚栄心を増長させたり、婚期を遅らせるなどの理由で不必要不利益であるとの意見がでた」<sup>10</sup>と述べている。

---

<sup>7</sup> 日本近代教育史事典編纂委員会編(1971)『日本近代教育史辞典』p. 423.

<sup>8</sup> 総合女性史研究会編(2000)『史料にみる日本女性のあゆみ』p. 142.

<sup>9</sup> 日本近代教育史辞典編纂委員会編(1971)『日本近代教育史辞典』p. 427.

<sup>10</sup> 日本近代教育史辞典編纂委員会編(1971)『日本近代教育史辞典』p. 427.

一方で、高等女学校は非常に進歩的な側面を持ちつつも、伝統的価値観を破れなかった。例えば、全国高等女学校長会議における菊池大麓文相が述べた訓示は代表なものと言えるだろう。即ち、菊池文相は「日本では此の婦女子と云うものは将来結婚して 妻になり母になるものであると云うことは女子の当然の身の成行きであると云う様に極って居るのであります、(中略)我邦(わがくに)に於いては女子の職と云うものは 独立して事を執るのではない、結婚して良妻賢母となると云うことが将来大多数の仕事であるから女子教育と云うものは此の任に適せしむると云うことを以て目的とせねばならぬのである」<sup>11</sup>と述べている。女学生が学んでいた科目の内訳を見ると、時間割の 30%以上は家庭運用に関する科目である。それらには、家事、裁縫、音楽、教育、手芸などが含まれる。同時に時間数を比べると、地理、歴史、数学、理科、図画より、国語や外国語に多くの時間が割かれ、こちらが重要視されていたことが伺える。

従って、高等女学校では全体的に科学技術よりも家庭運用に直結する教科を重んじられていた。貝原益軒の女子教法を見ると、特に裁縫が大事であると思われる。つまり「女子には、はやく女功をおしゆべし。女功とは、織り縫い、績み紡ぎ、すすぎ洗い、又は食をととのいものするわざを云う。女人は外事なし、かよの女功をつとむるを以て、しわざ(仕事)とす」<sup>12</sup>とされる。しかし『大正時代の身の上相談』には、十八才の女性からの次のような意見が紹介されている。彼女は生来裁縫が大嫌いで、「ひまさえあれば小説や雑誌などに親しんでいた罰はテキメン、もはや婚期も迫っているのに、自分の着物ひとつまとめられません」<sup>13</sup>と言った。このように強い羞恥心を感じるほど、裁縫は当時の女性の人生にとって重要なものだったのだろう。

もう一つの重要なテーマは、読み物の選択に関するものである。貝原益軒は「淫思なき古歌を多くよましめて、風雅の道をしらしむべし。これまた男子のごとく、はじめは、数目ある句、みじかき事ども、あまたよみおぼえさせて後、『孝経』の主旨、『論語』の学寺而篇、曹大家在『女誠』などをよましめ、孝・順・貞・潔の道をおしゆべし。(中略)又、『伊勢物語』、『源氏物語』など、其の詞は風雅なれど、かよの淫俗の事をしるせるふみを、はやく見せしむべからず」<sup>14</sup>と述べている。大正時代も読書がとりわけ重要視されていたようだ。『大正時代の身の上相談』の中にある、「煩悶女」というペンネ

<sup>11</sup> 総合女性史研究会編 (2000) 『史料にみる日本女性のあゆみ』 p. 144.

<sup>12</sup> 石川松太郎編 (1977) 『女大学集』 p. 16.

<sup>13</sup> カタログハウス編 (2002) 『大正時代の身の上相談』 pp.50-51.

<sup>14</sup> 石川松太郎編 (1977) 『女大学集』 p. 11.

ームの女性の意見を見てみよう。彼女は、女学校を卒業して、進学ために上京した。「ところが、本年四月頃から何をするのもいやで、ことに授業に出たりするのがたまらなく面倒くさく、そのくせ何をするでもなく、学課も気にかかりながらブラブラ貴い時を空費しています。」<sup>15</sup>死にたいほど悲しいと書いているこの女性の相談に対し、次のような回答が寄せられている。即ち「五月病」の理由や薬としては、「なるべく挑発的で俗悪な小説や感傷的で低級な物語を避けて、古今賢婦人の伝記とか、その他あまりむずかしくない修養書などを愛読するようになさるのがよろしい」<sup>16</sup>と述べられる。

上述したように、大正時代の高等女学校は江戸時代の女性の理想を元にして、良妻賢母を育てて、良妻賢母主義を強めていた。『日本近代教育史辞典』は「高等女学校の目的として、国民道徳の養成と婦徳の涵養に留意すべきことが付け加えられ、精神教育を強調した」<sup>17</sup>と述べている。

### 3.2. 女学生の生活

もちろん学校は授業だけでなく、女学生の生活は楽しみや悩みから成っていた。現代と同じく昔の女学生も雑誌が好きであった。二十世紀の始めに、最も人気があった雑誌は、『少女倶楽部』（1923年創刊）、『少女画報』（1912年創刊）、『少女の友』（1908年創刊）、『令女界』（1922年創刊）である。これらの雑誌には小説、エッセイ、短歌、詩、絵画、ファッション、手芸、織物などのさまざまな情報があつて、身の上相談もとても大事であった。雑誌は、その時代を反映するものであつて、そこに表れた豊富な情報をもとに、以下女学生の楽しみや悩みを明らかにしたい。

#### 3.2.1. 服装やヘアスタイル

明治維新より和装から洋装へ、日本髪から束髪へと流行が変わった。大正時代、断髪洋服の女性は「モガ」（「モダンガール」）と呼ばれた。当然、女性の雑誌にとって流行はいつも大事である。学生である女の子の髪型は、通学服と大いに関係があつた。通学服

---

<sup>15</sup> カタログハウス編（2002）『大正時代の身の上相談』 p.32.

<sup>16</sup> カタログハウス編（2002）『大正時代の身の上相談』 p.32.

<sup>17</sup> 日本近代教育史辞典編纂委員会編（1971）『日本近代教育史辞典』 p. 427.



が着物と袴だった大正期には長い髪を結い上げた髪型であったが、セーラー服やブレザーが定着した昭和期には、断髪（おかつぱ）が主流となった。

明治後期から大正後期ころの制服は矢絣の着物に袴姿の「はいからさん」のスタイルであった。「女袴」を履いて女学は自転車に乗って、通学ができた。袴姿のはいからさんスタイルがセーラー服やブレザーに変化したのは大正後期からである。『女学生手帳 大正・昭和 乙女らいふ』によれば、「何しろ下着から変えなくてはなたなかったのだから、袴からセーラー服への移行は一足飛びには行かなかったわけだ。しかし、政府の方針が大きな推進力となり、洋装制服の制定が進んで行きた」（『少女画報』昭和三年九月号）と書いている。

### 3.2.2. 美容相談

『女学生手帖 大正・昭和 乙女らいふ』を編纂した内田静枝は、「美容の悩みはいつの世もかわらないようだ」と述べているが、これは現在も変わらぬ普遍的な意見であろう。ここに収録された当時の雑誌には、次のような少女達の悩みで溢れている。「肩幅が体の割に広い」、「胸が大きくて恥ずかしくてたまりません」、「大きなお尻のために背縫いがひろがってしまいます」、「足だけが、ブテブテ太っているのです。私は洋服を着ない方がいいでしょうか」というものがある。また美容に関する商品、セスムーズ脱毛剤とか乳房バンド、美腰バンド、身長増進器、やせる薬、女性ホルモン、シャンプー、歯磨き、バタミルクローションの広告もたくさん掲載されている。

### 3.2.3. 身の上相談

ところが、外見よりも心や人生の悩みのほうがいつも深刻だった、友達関係、エス、恋愛、将来の進路などの心配がいろいろあった。雑誌に掲載されたこのような悩みに対する回答者の答えには時代性が現れる。

大正・昭和の女学生の人間関係を理解するため、「エス」というキーワードを説明したと思う。英語の「Sisters」という意味であって、普通の親しい友達の関係ではなかった。『女学生手帳 大正・昭和 乙女らいふ』によると、「親友同士とは違う関係だった。必ず一方が庇護者である<お姉様>となり、もう一方が守られる側の<妹>であること、一

対一の関係であることが基本だった<sup>18</sup>と書いている。エスの関係はいつもスムーズではなかったし、喧嘩したり、傷をつけたりしたこともあった。しかし、エスの愛は非常に強く、雑誌では、この愛をテーマにした小説は非常に人気があった。エスと自由に話せない女の子からの次のような相談がある。「私は女学校の三年生です。私は S さんを誰よりも愛し、且つ信じて居ります。S さんも亦私を愛して居ります。けれど二人は心から打ちとけることが出来ず、(中略)。どうぞ先生、私達二人が、心から打ちとけあって語ることが出来るようにして下さいませ」(『少女画報』昭和三年七月号)。回答者は二人が互い愛しているから、恥ずかしく思って、十分打ちとけることが出来ない。回答者は「ですからあなたの方からその羞恥をぶち破って、勇敢に、どんどん話しかけるべきでしょう」と勧めている。

どんな時代でも若い女子は恋愛の悩みがある。男女交際についての相談もあった。接吻された静子、抱かれると妊娠すると思っている美秋、妊娠して流産した悩める女、美男子の運転手に恋してしまった少女は皆恋愛で悩んでいる。ところが、そのような問題に対する回答者は普通より非常に厳しい。「キッスなんかということは第一衛生的によくありません、そのために結核が感染したりその他の病気がうつったりすることは随分多いことです。(中略)活動写真やその他に影響された外国人の悪風などまねるのは猿真似にも等しい愚かなことです」(『令女界』昭和九年四月号)という答えもある。良妻賢母主義の風に応じた回答である。「一日も早くその不真面目さを清算して、大日本帝国女性の真の姿にたちかえってほしいものです。」(『令女界』昭和十二年七月号)

### 3.2.4 女学の将来

高等女学校を卒業後、女性が家事や育児に専念する専業主婦になったことは普通であった。『時代を生きた女たち 新・日本女性通史』によると、「もっとも高等女学校の卒業生の中で就職をする女性は多数派とはいえ、たとえば二十年代の卒業生の進路のうち就職は一割以下である」<sup>19</sup>と述べている。比較的高い教育を受けた「職業婦人」と呼ばれる女性の中で学校教員、看護婦、電話交換手、義務員やタイピスト、店員も増加していった。

---

<sup>18</sup> 内田静枝編(2005)『女学生手帖 大正・昭和 乙女らいふ』p.14.

<sup>19</sup> 総合女性史研究会編(2010)『時代を生きた女たち 新・日本女性通史』p.175.

#### 4. 結び

長い歴史を持っている日本では、時代が経つとともに、女性のイメージも変わった。また時代が代わるとともに、女性に対する教育も変化した。近代に入ると、女性や男性の平等のテーマが中心になってくる。しかし、近代の『女大学』には同権という言葉が使われているのに、男性と女性の教育は1947年までかなり違っていたとされる。

高等女学校は、明治から昭和時代を反映し、進歩と伝統の両方を含むものだった。つまり明治維新による西欧化とともに、江戸時代の『女大学』の理想的イメージが基礎となっていたのだ。江戸時代の封建的家族制度が、明治31年の民法に温存されたように、また江戸時代の教訓書『女大学』にみられた良妻賢母主義は、明治以降も残り、夫、舅、姑、子どもという家族関係を規定していくこととなる。

大正初期から婦人問題が社会の注目をひき、女性教育の導入とともに、女性の生活がある程度変わって行った。楽しみも悩みも変化した。新たな時代の女学生には、新たな日常、将来への希望にあふれていた。

#### 参考文献

- 石川松太郎編（1977）『女大学集』平凡社  
カタログハウス編（2002）『大正時代の身の上相談』筑摩書房  
素朴な疑問探求会編（2008）『明治・大正人の朝から晩まで』河出書房新社  
総合女性史研究会編（2000）『史料にみる日本女性のあゆみ』吉川弘文館  
総合女性史研究会編（2010）『時代を生きた女たち 新・日本女性通史』朝日新聞出版  
内田静枝編（2005）『女学生手帳 大正・昭和 乙女らいふ』河出書房新社  
日本近代教育史辞典編纂委員会編（1971）『日本近代教育史辞典』平凡社